

胃食道逆流症（GERD）による咳嗽症状患者と咽喉頭異常感症状患者における病態の比較検討

滋賀医科大学附属病院 総合診療部

松原英俊、井手克行、竹内由紀子、西山順滋、田中努、三ツ浪健一

GERDの食道外症状は咳嗽のほか咽喉頭異常感、胸痛、背部痛など多彩である。今回食道外症状の代表である咳嗽と咽喉頭異常感症について2つの症状間での共通点や相違点を見つけ病態の理解を試みた。

【対象】平成13年1月より平成18年4月末日の期間に当科を初診しGERD治療をうけ症状改善を認めた症例。アンケートの主訴の項目に「咳」の症状を記載した咳嗽群(n=32)と、「のど」の症状を記載した咽喉頭群(n=15)。

【方法】治療前に生活歴・各種症状の有無等、胸やけや吞酸などの食道症状の頻度、症状の日内変動についてアンケートを行い、また毎受診時に症状日誌を記載して頂き、これらを解析した。

【結果と考案】咳嗽群において有意に多い常習的飲酒を認め、逆に胸焼けの経験を有するものが少なかった。また咽喉頭群では吞酸やおくびなどの食道症状がより多く認められるのに対し、胸焼けを感じる頻度はむしろ少ない傾向を認めた。症状日誌の解析より症状の重症度は、咳嗽群では咽喉頭症状が主症状に比較して軽症であるのに対し、咽喉頭群では主症状と比較して咳嗽症状もかなりの強さで感じていることが多かった。また両群ともに咳嗽と咽喉頭異常感の2つの症状の共に有する症例を75%以上認めた。治療経過については両群とも80%を超える症例で咳嗽症状、咽喉頭異常感症状が共に改善をした。以上より2つの病態の共通点と相違点の一部を明らかにすることができた。